

# 大学出版

No.

2004.6

61 夏

大学と社会を結ぶ知のネットワーク

特集

## 環境問題への アプローチ

昭和レトロと原風景 \* 品田 穰 —2

環境にとって経済とは \* 白川 直樹 —6

「非知のエコロジー」が目指すもの \* 馬場 靖雄 —10

環境問題と「文理融合」 \* 松井 健 —14

### ● 連載

装丁の四季——夏 藤田嗣治の装丁 \* 大貫 伸樹 —表2

古書のある風景 2 <sup>ヴェネチア</sup>面沙の向こうの廃墟 \* 村井 則夫 —18

歩く・見る・聞く  
知のネットワーク 34 武蔵野音楽大学楽器博物館 —20

大学出版部ニュース —22

関西支部だより —表3

THE ASSOCIATION OF JAPANESE UNIVERSITY PRESSES

日本大学出版部協会



美大をめざし予備校に通うデザイン科の学生は、みんな水彩絵の具や木炭などを入れる絵の具箱を持ち歩いてきた。その一群に交じって私は、藤田嗣治に魅了されていたのだろう。絵の具箱の内側に絵はがきを貼り、一ヶ月ごとに貼り替えて観賞していた。藤田の絵はがきは、一九六三年「つばめと子供」や一九六五年「赤いスカート」の少女などで、ほのぼのとして眺めているだけで心安らぐ絵だった。美術作品としては、世俗的成功や裕福な生活と引き換えに身に付いてしまった技巧主義に走ったといわれるもので、評価は高くない晩年の作であった。

部屋の様々替えて古い絵の具箱が出て来た時の郷愁からか、最近になって藤田の装丁を集め始めた。さしあたって入手出来た本は、ほとんどが、戦車をモチーフにした草葉集『ノ口高知』（鱒書房、昭和一六年）や軍艦と旭日旗を描いた植村茂夫『海軍魂』（東水社、昭和一八年）のような、従軍画家として巨腕を振るつたころのもので、絵はがきからはほど遠いイメージの装丁が多く、強い衝撃を受けた。

藤田と同じように、戦時中に苦汁を嘗めた表現者に花森安治がいる。花森は、傷痍軍人として戦地を離れて帰国し、大政翼賛会で仕事をしようになる。戦後、「ボクは、たしかに戦争犯罪をおかした。言い訳をさせてもらおうなら、当時は、何も知らなかった。だまされた。しかしそんなことで免罪されるとは思わない。これからは絶対だまされたくない。だまされたい人たちは

# 藤田嗣治の装丁

おおぬき しんじゅ  
大貫 伸樹 (ブック・デザイナー)



植村茂夫『海軍魂』  
(東水社、昭和18年)  
装丁=藤田嗣治

をふやしていく。その決意と使命感に免じて、過去の罪はせめて執行猶予にしてみようとしている、とおもっている。「週刊朝日、昭和四六年」と「戦争で最も悲しい思いをした女性」のための月刊誌「暮しの手帖」の編集に生涯を捧げた。

一方、藤田は、従軍画家としての戦争絵画を描いたことを戦争協力者として過度の批判を受け、嫌気がさしたのか、日本でのつらい過去と故郷とに訣別し、一九五五年、六九歳の時に、かつて藤田の芸術を開花させたフランスに帰化する。一九五九年カトリックの洗礼を受け、十字架の保護をもとめ、煉獄の図や十字架などの宗教絵画を描き続ける。贖罪を念じながら描かれた晩年の絵は、特に女子供に向けた慈悲に満ちており、忘れようにも忘れられない故国へ向けて発せられた謝罪のメッセージだったのでないだろうか。花森の「生れた国は、教えられたとおり、身も心も焼きつくして、愛しぬいた末に、みごとに裏切られた。もう金輪際、こんな国を愛することは、やめた。」という言葉に、藤田も同じ思いだったに違いない。

藤田は、五歳の時に、花森は旧制高校一年の時に母を失っている。その為か、二人とも女性に許しを乞うような作品を残した。

藤田晩年の優しさに溢れた作が、一人暮して潤いのなくなった予備校生の精神に、安らぎをあたえ、毎日持ち歩く絵の具箱に絵はがきを貼らせるほどに琴線を揺らしたのだろう。

## 特集

# 環境問題への アプローチ

「木を見て森を見ず」という言葉があります。今号は環境をテーマに特集を組みましたが、専門化が進んだ環境問題では、まさに今隣の木をよく見ることが求められています。

人間が自然を求める欲求に関して、品田氏は「内なる自然」という、遺伝子に組み込まれた本能を仮定して、考察しています。緑地率による空間の評価を行い、人と緑の間を関連づけています。

環境と経済活動の間にある対立に関して白川氏は、その対立の原因を解き明かし、評価を行い、環境の維持と経済活動を両立させるための合理的根拠を与える一つの手法として環境経済学を述べています。

現代社会が直面する環境問題について、馬場氏はニクラス・ルーマンの説を引き、環境問題に対処するさいの、私たちの知の有りようについて再考を促します。

環境問題の専門家に対して松井氏からは、個別の専門分野だけでなく、問題を構成している多くの学問領域に目を向けることが提言されています。自然の問題に関わってきた松井氏が文・理の壁に苦慮したことが窺えます。

# 昭和レトロと原風景

品田 穰

(東京農業大学客員教授)

昭和レトロが若者にも人気だという。大きな古時計に小さなちやぶ台、縁側の日だまりでネコとうたた寝をする。里の小川ではメダカが遊びホタルが……。そんな原風景に何故か惹かれる。しかも、今回だけではない。昨年は江戸四百年、つい数年前にも、江戸のリサイクルや花鳥風月がブームになったことがある。なぜ、人々は、時代を超えて、昔の暮らしや風景に惹かれるのだろうか。心の中にかつての暮らしや自然に人々を引きつけて止まないものもあるのだろうか。

## 人間に自然は何故必要か

「トンボか、電力か」と、尾瀬のダム問題が新聞の特集記事になった頃学生時代を過ごした私は、数年後、自然保護と開発の渦中に、当事者として身を置くことになる。道路公団の上高地スカイライン計画である。文部省の文化財保護委員会でスカイラインに難色を示す私は、建設側と議

論をするうちに「自然は何故必要か、証明できるか?」「証明してみせます」と約束してしまったというわけなのである。スカイライン計画は阻止したものの、約束だけは残ってしまった。

私は、まず、考えられる限りの思いつきを並べたて、こんなに役に立つ(効用がある)のだから自然は必要なのだと説明するつもりだった。自然は酸素や食料を供給し、汚染物質を吸収する。そればかりではない。騒音防止にも、公害の指標にもなるし……というわけである。

しかし、まもなくこの方法では「自然はなぜ必要か」を説明するのは難しいことがわかってきた。

そのうえ、この考え方は、自然を資源として役立てようという人間中心主義が前提になっている。もともと、資源以外の「ヒトと自然のかかわり」は対象外のことであった。

そこで、「人間と自然が欠かせないほどの構造的なかわりがあるとしたら、自然が失われたとき、人間の側に何

らかの総合的な反応があらわれるはずだ」と考えた。そして、その反応として「自然を求めめる行動」に着目した。そこから逆に、原因を探っていこうというわけである。

自然を求めめる行動は、自然が失われてきて必要な状態になつたときが問題である。そう考えて、都市化が進行し、身の回りから自然が失われてきた平城や平安の都の人々のふるまいをみることにした。その結果、和歌や倭絵、庭園など、明らかに自然を求めめる様々な行動の徴候が見出された。さらに、都市化がすすみ人口百万人、人口密度数万人に達して自然の失われた大都市の江戸では、自然が失われれば失われるほど、切実に自然を求めめる行動があらわれることが認められた。これらの事実から人間に必要な自然が欠けると、欠けたものを補うかのように自然を求めて行動するということが言えそうであった。逆に言うと、自然を求めめる行動の原因は、自然が少なくなってきたかららしいと言うことができる。

しかし、情報に乏しい歴史的事実からだけでは微妙な反応は捉えようがない。そこで、一九七二年から一九七四年にかけて環境や人口密度の異なる東京・仙台・米沢など、二三箇所で、「環境に対する行動や反応」と「緑の空間」のかかわりについて、できるだけ客観的に調べた。

その結果、一定の限界値に達するまでは、環境の変化があるにもかかわらず安定状態を保っているが、限界値を境に急激に変化して、反応に安定—不安定相の二相があるこ

とが認められた。

この急速に減少する変曲点、すなわち安定相から不安定相の二相分岐点の人口密度は一平方キロメートル当り約二千二百人、緑地率約六〇%であった。

そうした人々の認識とほぼ同時に、住民の行動が変化してくる。まず、隣接する自然地への行動が増える。人口密度が三千人から五千人になると、今度は少し遠出して日帰りのハイキングをしようという人が増えてくる。さらに自然がなくなると、泊まりがけの旅行が増えてくる。こうして「自然がなくなると自然を求めようになる」ということが、歴史時代ばかりでなく現代においても言えることが改めて確認された。

もし、このことが普遍的な現象だとすると、「ヒト」と、「緑の空間」の間には、特別な結びつきがあるということになる。そうなると、次の課題は、一体、何が、「ヒト」と「緑の空間」を結びつけているのかという問題である。

調査の結果、人々が「自然を求めて行動」する大きな理由は「やすらぎを求めて」であった。そして、やすらぎの高い自然は「見通しのよい草原・疎開林型自然」で、かつて人類の祖先が森林から草原に進出したとき、外敵の防衛上、一定以上の見通しを必要としたことから、両者の結びつきが、進化の過程で生じたと考えられることができる。

進化の過程で自然と結びついているということは、言葉を変えたと「内なる自然」が組み込まれているとも言える。

## 内なる自然―原風景の謎

最近、棚田の復元や、手づくり、自然回帰、ふるさと志向、レトロや伝統、スローライフが人々の心を捉えている。なぜ、便利化・効率化を謳歌したつい先日までとは、うって変わった社会現象が生まれつつあるのか。

それらに共通しているものは、「人間のために役に立たせる自然」ではなく、「自然と一体化した、人間らしい暮らし」を求めていることである。

若者や子どもも巻き込んだこうした流れには、単なる文明の反動や、ノスタルジアでない、元に戻りたくなる何か基本的なものがあるような気がする。そこで、あらためて自然に対する考え方、自然観を見てみよう。

これまで、自然についての基本的考え方は、さまざまに変遷してきた。太古の昔から自然の中で食べ物を得て暮らしていた人々に、自然を人間の役に立てようという発想があったとは思えない。それが、産業革命の結果、人々は、自然を単なる資源、つまり、人間の利益のために利用する材料・部品と考えるようになった。それが、一九六〇年代から七〇年代にかけての環境危機の時代に、これまでの価値観が根本から見直され、自然に対する人間中心主義からの脱却を必要とした。そして、西洋の自然観は人間中心主義の反対側に大きく振れ、自然には人間にかかわらない固有の権利があるとする「動物解放論」や「自然の権利」に関する主張がなされ、さらに、ディープレコロジーなどの

思想も見られるようになった。これらの考え方は、環境の危機に触発、連動して起きたと見ることができる。しかし、この考え方に基づいて動物などの自然に生存権があるとすると、その生存権を人間が侵すことは許されず、牛を殺し、食べることもできなくなる。それでは人間が困るので、何とか矛盾を解決するためのさまざまな説（たとえば、意識のない動物は殺して良いなど）が提案されたが、新たな差別を生むだけで解決にならなかった。

こうして、人間中心主義と人間非中心主義がともに行き詰まるなかで、自然と人間を区別せず、自然と一体化して暮らしてきた先住民族や東洋の自然観があらためて注目されてきた。なかでも、我が国を中心とした東洋の自然観は、ほぼ一貫して、人間と自然の関係を「一体不二」のものとして、古くは万葉の時代から、清少納言、兼好法師、を経て親鸞、道元、芭蕉と、ぶれることなく日本古来の伝統的自然観が続いてきていた。これらは、明らかに人間中心主義、人間非中心主義と環境の危機に直面して大きくぶれた西洋の思想を乗り越えたもので、自然を人間の役に立たせる存在から、人間を自然と一体のものとして考える、古くて新しい自然（じねん）の思想であった。

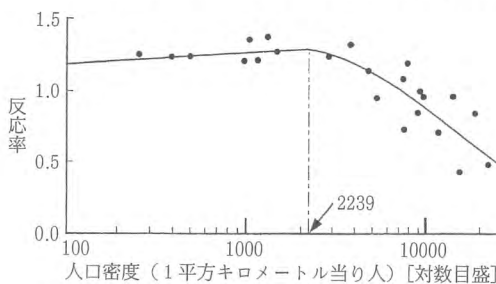
一方、欧米で第三の道として模索された人間を生物や地域の共同体の一員として捉える考え方は、目標が共同体の安定や美を崩さないことを目指していた。このため、共同体の一員である他の生物を食べたり飼ったりすることも許

されず、共同体の安定のために、ひたすらにフリーズして  
いなくてはならなかった。これでは生きていけないので、  
何とか解決の道を見つける必要があった。考えてみると、  
自然界では、生物が、食べたり食べられたりするダイナミ  
ックな活動の中で動的な平衡を保って安定しているもので  
ある。この動的な共同体の考え方に立てば、人間が他の生  
物に干渉する事は許される。しかし、こんどは、人間が突  
出した力を自由に使うと、共同体の安定をも崩してしま  
かねない。したがって、なんらかの自己規制が必要になる。  
われわれが他の生物を殺すとき、本能的にかわいそうと  
感じるのは、進化の過程で遺伝子にいつの間にか組み込ま  
れている感性が「内なる自然」として存在することによっ  
て、自己規制として働いている。この「内なる自然」が自  
然との一体化によって組み込まれたものとする、いま、  
人々がレトロや伝統を通じて「自然と一体化した人間らしい  
暮らし」を求めているのは、「内なる自然」がそうさせて  
いるとも言えよう。では、この人間に組み込まれて、目には  
見えない「内なる自然」の「実像」はどのようなもので  
あろうか。私はその一つが「原風景」と言われているもの  
ではないかと考えている。「原風景」は人によってさまざま  
まで共通したものがないと考えられているが、私はそうで  
もないのではないかと思っている。下図で人口密度、約二  
千二百人、緑地率で六〇%のところに評価の明らかな変曲  
点が見られることにあらためて着目したい。なぜ、このよ

うな二相分岐点ができたのだ  
ろうか。この点までは、減少  
しても同じような感じ方の緑  
の空間がある一方で、この点  
を境に、急速に空間の評価が  
悪化・不安定化する。という  
ことは、変曲点に至るまでは  
緑に対して共通して抱く感覚  
があり、なんらかの「基準に  
なる緑の空間像」が存在する  
ことになる。したがって、こ  
の「基準となる緑の空間像」  
は、とりもなおさず、ヒトと  
緑のかかわりの原点の風景、  
すなわち「原風景」を意味して  
いるのではなからうか。そ  
うだとすると、これまでイメ  
ージの存在でしかなかった原  
風景に「実像」が浮かびあが  
ってくる。それは、半分以上  
緑のある、見通しのよい自然  
で、人口密度が二・三千人の  
のどかな風景である。

そして、それは進化の過程で  
組み込まれていた人類の原  
風景に一致する。と同時にそ  
れは、民族の原風景でもあり、  
昭和レトロの原風景にはかな  
らない。

参考文献・品田穰『ヒトと緑の空間—  
かかわりの原構造—』  
東海大学出版会（二〇〇四年二月刊）



周辺の緑や自然環境に対する肯定的反応率の変化

# 環境にとって経済とは

白川 直樹

(筑波大学機能工学系講師)

経済活動が環境の破壊者として敵視されるようになったのはいつごろからだろうか。公害対策基本法に経済調和条項が盛り込まれ、議論のあげくに削除されたのは一九六七から一九七〇年の出来事であった。レイチェル・カーソンの名著『沈黙の春』の出版は一九六二年、水俣病の発見は一九五六年のことである。二〇世紀半ば過ぎという時期は、経済と環境の衝突が各地で浮き彫りになり「環境問題」が経済活動と生活環境の矛盾という構図で一般の意識にのぼりはじめた時代であるといえる。

経済主体が環境を考慮に入れないで行動するため起きる環境破壊、いわゆる外部不経済の概念を論じたビグーの『厚生経済学』は一九二〇年に初版が出されている。ジョン・ミューアが環境保護団体シエラ・クラブを設立したのが一八九二年、ヨセミテが自然公園として認可されたのが一八六四年、ソロウが『森の生活』で経済活動と一線を画した自然の中の生活の意義を唱えたのが一八五四年と、

環境に悪影響を与え破壊するものとして経済活動を捉える見方は世紀をこえて遡っても見出すことができる。田中正造が渡良瀬川の鉅毒問題を国会で糾弾したのは一八九一年のことだった。

さて、一九一五年に内務省は水力発電者に「漁梯」(取水堰を魚が上下できるようにする施設、現在は魚道と呼ぶ)の設置を指示している。また一八九六年に公布された旧河川法の第十九条には「流水ノ清潔」という語句が現れる。これらは川の魚や水質に配慮して経済活動を制限する規定であるが、前者は内水面漁業、後者は農業用水をはじめとする各種利水者の保護を念頭に置いていた。ここにあるのは「産業⇨経済」対「生活⇨環境」という対立軸ではない。魚や水質といった環境要素を対象にしながら、焦点はあくまで産業間の利害調整にある。渡良瀬川の鉅毒問題も洪水によって話が複雑にされているが、根本にあったのは足尾銅山と下流農業の利害相反であった。



このように、環境をめぐる対立は産業活動対生活環境の構図で顕在化する以前から、産業間の利害衝突という形で現れている。経済活動にとって環境は、①経済活動の外部にあって分析に乗らないものとして無視されるか、②有用な資源やサービスの提供者として利用されるか、③経済活動を量と質の面から制約する要因として厄介者扱いされるか、のいずれかであった。②の有用性の奪い合い、またはある主体の①または②による行動の結果が他の主体に③の制約要因をもたらしてしまう場合に環境をめぐる衝突が起きたが、話が産業間の調整にとどまっている限り「金銭収支」や「資源の効率的配分」といった共通概念、互いに理解し納得して受け入れ合うことのできる価値基準が存在し、いわば同じ土俵上の勝負が可能である。このとき環境は必ずしも経済と全面対決する存在ではなく、各経済主体がもつ環境とのかかわりの濃淡を評価して調整することが環境マネジメントの役割となる。

さて、環境問題の発生を経済活動の側から眺めると、三つの要因が浮かび上がってくる。一つめは、人間活動が近接すると互いの行動の影響を受け合うようになるという点である。川沿いの二つの工場が遠く隔たっていたら問題が起きなくとも、すぐそばに並べば下流側の工場は排水の影響を受けてしまう。このように互いの影響は非対称なことが多く、原因者と被害者、費用負担者と受益者の不一致がしばしば問題解決の壁となる。

二つめは活動規模である。時間・空間的に小さな活動であれば、人為攪乱は自然環境それ自体がもつ変動に隠されて顕在化しない。活動規模が大きくなると環境インパクトも増大し、自然変動の範囲を越えた不可逆な変化が起こるようになる。このとき湿潤高温な地域や自然変動の激しい地域では環境自身のもつ回復力や対応力で大きな攪乱にも短い時間で対処できるが、ヨーロッパやオーストラリアのように半乾燥で安定した地域ではひとたび破壊した自然はなかなか元に戻らない。ヨーロッパで自然環境保護の取り組みが早くから進んだ背景にはこうした風土の性質も作用しているだろう。オーストラリアの河川では、大規模かつ徹底的な流域外導水によって生じた河川地形や水域生態系の変容が現在大きな問題となっている。

三つめの要因は、人間活動の高度化による人間自身の変化である。ある程度の安全と快適性を手に入れた人類は、次なる局面で環境の良好さを希求する段階を迎えた。悪い環境は我々の身を脅かし、心身の快さを損なうからである。その意味で環境はモノやサービスと質的にそう差があるわけではなく、個人の効用を高める一つの要素としてそれらの延長線上に存在する。産業活動に伴う環境汚染や人間活動の拡大による自然破壊など、環境の財としての価値（希少性）を高める事象もこれに拍車をかけた。

これらの要因があいまって、産業活動間、そして産業と生活の間に環境をめぐる摩擦を生むこととなる。その中間

には、経済活動でありながら生活と不可分に結びついている農業や漁業といった部門の紛争もあった。

こうして起きる衝突を解きほぐすには何が必要だろうか。まず産業間についていえば、原因の特定と物量ベースでの定量化、影響の貨幣ベースでの定量化、そして社会全体として大きな無駄が生じないような費用分担方法の探求と実現、といった手順が有効であろう。環境を記述する手段として経済学の活躍の場がここに見出される。

一方、人間が追求する効用の一部としての環境、という見方では、人の意識や心理といった要因が大きく効いてくる。生活や生業を巻き込んだ利害調整では、同じ価値基準のもとで「定量的に」問題を解けばよい産業の場合と違い、相異なる価値基準をもって「定性的に」対決する各主体を納得させうる解を示さねばならない。これはいかにも難儀な仕事である。

この不幸な価値観の溝を埋めんとする努力は各方面から盛んに試みられている。経済側から歩を進める環境経済学、「人間」の側に立つ環境倫理、環境教育、環境心理、環境社会学等々、そして環境そのものの自然科学的性質に糸口を見出そうとする方法などである。環境経済学はさきほど述べた環境の経済的側面の記述に力を発揮する。「人間」からの取り組みは経済論理から抜け落ちてしまう部分にスポットライトを当て、個々の人格を尊重した改善策を提示してくれる。自然科学的なモデルはこの世界が全体として

どの方向に向かっているのか、またどういった因果関係が環境変化を支配しているのか我々に教えてくれる。

しかし、経済と環境、そしてそれに深く関わる人間という三者三様の価値基準のせめぎあいをマネージするには、もう一段階メタな立場から問題を俯瞰することが必要である。それは、どれにも属さない新たな価値基準を打ち立て、それに三者を従わせていくという意味ではない。むしろ三つの立場に入り込み、各価値基準を上手に使い分けながら現実の問題を処置していくという方向である。

環境の価値という問題を考えてみよう。環境経済学ではこれを利用価値と非利用価値に分類し、さらに後者を将来利用する可能性のあるオプション価値や心理的効果を表す存在価値などに分けて計測していく方法が現在主流となっている。しかしこれらはいずれも経済活動に反映される価値や人間が意識する価値を示すに過ぎず、環境がもっている価値の一部しか評価できない体系になっている。これは当然のことで、経済だけで環境のすべてを表現できるはずがないし、またしなげなければならない必然性もない。

環境は三つの経路を介して人間に価値をもたらす。直接身体に働きかけ、心情に働きかけ、そして経済システムを通して人間と接触する。これを踏まえ、環境のもつ価値を四つの面から捉えることができる。第一に「モノ」としての価値、資源として消費される環境。第二に「場」ないしは空間としての価値。第三に人類存続の物理基盤を整えて

くれる「機能」の価値。そして第四に「存在」が人々の心を豊かにし快さを感じさせてくれる価値である。「モノ」としての価値には経済学的な評価手法がよくなじむだろう。「場」の価値もレクリエーションの費用や地価の観察などにより一定の貨幣換算が可能である。これに対し「機能」の価値は経済評価しても説得力をもち得ないし、「存在」の価値も人間側の要因に大きく左右される。これらの価値を論じるには自然科学や人文科学の助けを借り、それらの言葉でもって表現しなければならぬ。そして最終的な総合評価に結論を出すのは各人の良心的判断力に任されるといふほかなく、万人を納得させる客観的で唯一の解など望むべくもないのである。

複雑な自然環境、そして複雑な人間社会のすべてを単一の価値基準で割り切ろうとするのは無理であり愚策である。それぞれに異なった特性を活かして憂鬱な現実を改善し、総合的により適切な解決に近づけていくとする努力こそ人類の叡智が最大限に発揮される場面ではなからうか。

では、環境経済学の強みとは何であろうか。それは数字に裏打ちされたその頑健な経済論理にある。高尚な環境倫理を持ち合わせない人間でも、いやむしろそんな人間ほど自らの経済的利益には忠実に従って行動する。すなわち人間の行動を説明し支配する力が経済論理には備わっており、これを逆用すれば環境観念の薄い人間にあたかも環境配慮をしているかのような行動をとらせることができるのである。

る。環境税、課徴金、環境補助金、汚染権取引などの「仕組み」がこれに当たる。仕組みをうまく作るだけで大勢の人間が環境目的に合う行動をとるようになるのなら、これを利用しない手はないだろう。

ただし、この手段はあまりに強力なので、貧困層や地域格差などの公平性、文化、心理規範その他の社会影響といった「環境」および「人間」に与える影響を見極めながら行使する必要がある。経済論理のもつグローバルな面を押して立ててローカルな価値を踏み潰す愚を冒してはならないが、国際機関による総合河川開発など資源やエネルギーに関わる分野では伝統的な秩序に基づいた地域社会の安定を脅かす可能性も危惧されている。

環境にとって経済は、環境の側面を記述する「経済学」であり、環境に働く外力たる「経済活動」であり、環境目的達成の戦略的手段として利用すべき「経済メカニズム」でもある。人間活動がこの段階まで到達してしまつた以上、もはや環境と経済の対立を完全に消し去ることは夢物語にすぎない。理想像を胸に抱いて元気を出すことも必要だが、現実の深刻かつ緊急な問題には、論理的でシンプルな合理性ではとても太刀打ちできない。むしろ、誰もが少しずつ妥協をし、異なる価値基準の並存を認め、利用するものは利用する、といった迂遠なやり方こそが現実を改善に導いていくのもまた事実なのである。

# 「非知のエコロジー」が目指すもの

馬場 靖雄

(大東文化大学経済学部教授)

九八年に物故したドイツの社会学者ニクラス・ルーマンはかねてより、自身の社会システム理論の対象は、システムそのものではなくシステムと環境の差異であると述べていた。もちろんここでは「環境」という言葉は、エコロジーで扱われる自然環境とは異なる意味で使われている。しかしルーマン理論において環境がどう論じられているかを見ることを通して、現代社会が直面する環境問題にアプローチするうえでヒントを引き出しうるようにも思われる。われわれが何かをひとまとまりのもの(システム)として考察しようとする時、その対象は常に何らかの周囲(環境)の中に位置している。生物も人間も集団も社会も、あらゆるシステムは複雑な環境の中で自己を維持する統一体であり、したがってシステムが有する複雑性は環境よりも小さい。ルーマンの壮大な社会システム理論の出発点であるこの単純な命題から、次のような発想を導き出すこともできる。システムをそれ自体自己完結したものとして扱う

だけでは不十分である。システムの内側にのみ目を向けていたのでは、環境がシステムに及ぼす、また環境に対してシステムが与える複雑な影響関係を十分に考慮できないからだ。今やわれわれは目を外へと向け、システムと環境との調和の取れた関係を構想すべきである云々。「外へ目を向けよ」というこの種の発想が、環境経済学や環境倫理学を初めとして、現在いたる所で登場してきているのは容易に見て取れるだろう。前者ではこう主張される。従来のように、経済を生産と消費からなる閉じられたサイクルとして捉えるだけでは不十分である。そのようなイメージは、資源としての、また廃棄物の投棄先としての自然が無限の容量をもつとの誤った前提を措いていたからだ。今やわれわれは、経済のサイクルと、その外側に位置する有限な自然との関係を考慮しつつ、持続可能な社会のあり方を模索しなければならない。この議論はもちろん間違っていないし、必要かつ有益なものではある。しかしそこにはある

種の落とし穴が含まれているようにも思われる。

社会システム理論においてこの種の発想をいち早く提起したのは、ルーマンの師匠格にあたるタルコット・パーソンズだった。パーソンズは社会システムが自身を維持していくためには「適応・目標達成・統合・潜在的パターン維持」という四つの機能（頭文字を取って「AGIL」と呼ばれる）を満たさねばならないと考えた。彼はまず、社会を構成する四つの領域（経済・政治・共同体・文化）それぞれがAGILの機能を担うことを示そうとした。そして次のステップとして、全体としての社会が、より包括的な「行為システム」の一機能を担当する「セクション」と主張した。要するに、総体としての社会のその「外」を考えようとしたわけである。そしてこの社会学者の最晩年においては、行為システムのさらに外に広がる、およそ人間が体験しうる世界そのものを包摂する「人間の条件」システムが構想された。自然環境はこのシステムのA部門に位置づけられることになる。

より包括的な「外」へと弛むことなく歩み続けようとするパーソンズの試みを振り返ってみて気付くのは、そこではシステムとその環境の関係が、より包括的なシステムの内部関係として把握されているということである。「システムと環境の関係を考慮せよ」という方針は、「より包括的なシステムを考えよ」ということに他ならない。したがって当然のことながら、「その包括的システムのさらにそ

の外があるはずだ。それを考慮しない限り議論は不十分なままだ」という話になる。これは先に述べたような「外に目を向けよ」という議論の大半に関しても当てはまるだろう。だからこそこの種の議論は、「さらにその外」を求めて果てしなく続いていく。そして時には、パーソンズの場合のように壮大すぎてほとんどコメント不可能な地点まで至ってしまう。あるいは「自然の権利」を極端なかたちで強調するある種の論者のように、本気で受け取っていいのかどうか迷うような地点にまで進んでいくことになる。従来は「権利」というものは人間のみが有するとされてきた。しかし今や権利概念はより拡張されて「外」へと適用されねばならない。動物にもまた権利が認められるべきである。いや、樹木ですら権利をもち、法廷に立つことのできる当事者適格性を有するはずである云々。

一方ルーマンによれば、システムと環境の差異を考えることはできても、両者の関係について語ることはできない。環境は、システムと関係を取り結びうるような確固とした同一物ではなく、あくまでも複雑で捉えきれない残余にすぎないからである。もちろんわれわれは常にシステムと環境の関係について語る。しかしその場合の「環境」は、特定のシステムの内部において引かれた「システム／環境」の区別に基づくものとなってしまっている。それは環境そのものではなく、あくまでシステムから見た環境にすぎない、といってもいい。従来の経済学や社会学は自然環境を

十分に考慮してこなかった云々と述べるのは正当である。

しかしその時考えられているのは、経済学や社会学の視点から切り縮められ単純化された環境に他ならない。例えばコスト計算の対象としての自然であり、あるいは社会とは区別されるべきものとしての自然である。「社会／自然」という、今日では問題がないように思われる区別は、かつては決して自明なものではなかった。中世神学においては自然の反対項は神の恩寵だったし、近世においては自然は文明や精神に対置されていたのである。

ルーマンがしばしば引き合いに出す特異な数学者、スペンサー・ブラウンにならっていえば、システムにとっての環境は、「システム／環境」の区別が、当の区別の一方の側であるシステムの中へと再参入 (re-entry) することによって生じる、ということになる。例えば「動物／人間」という区別は、この区別の一方の側である「人間」の内部に再参入するかたちでしか用いられない。動物の側でそんな区別が問題になることはないからである。

したがってルーマンにとって環境についての知とは、再参入を通して見た環境に関する知に他ならず、そこではどうしても「再参入によって眺められた環境／環境そのもの」というずれが生じてこざるをえない。その意味で知を獲得することは、同時に非知を産み出し拡大することに他ならない。だからこそルーマンは、晩年の論文集『近代の観察』(拙訳、法政大学出版局) の約三分の一を占める論考を

「非知のエコロジー」と題しているのである。しかしここでいう「非知」は、単に克服されるべき状態としての「無知」とは異なっている。第一にそれは常に新たに生じてくるものであって、そもそも克服することなど不可能である。第二に、非知は決してわれわれを躊躇させたり行動を思い留まらせたりするだけではない。むしろ今日では、長期的な、あるいは微細にまで及ぶ環境への影響ないし環境からの影響を知れば知るほど、何もかもが危なっかしくて何も行動できないという状態に陥りかねない。あるいは高度な技術を駆使すればするほど、かえってカタストロフィの危険が高まってしまう。しかし何もしないこと、技術を放棄することもまた固有のリスクを孕んでいるのである。そのような状況下ではむしろ、非知こそがゴルディアスの結び目を両断する剣となってくれるかもしれない。蛇足ながら、現在の「唯一の超大国」の指導者や、日本で絶大な人気を維持している一部の政治家の単純きわまりない言動が、ある種の爽快感をもたらすものとして歓迎されているのも、今述べた事態が背景となっているようにも思われる。

そもそも環境問題が単に現実的な課題としてだけでなく、社会思想・社会理論にとっても衝撃的だったのは、それがわれわれに非知のまま行動することを強いるからではなかったのだろうか。問題は単に、われわれは今まで人間中心主義がもたらす視野狭窄のゆえに自然を十分に考慮してこなかった云々ということではない。単に思想が、態度が誤

っていた、今や正しい思想へと「改心」する必要があるなどという話ではないのである。

では重要なのは、環境について論じるさまざまな論者が実は「自分は何が問題なのかをよく知っている」と自称しているにすぎないことを暴露し、それら論者に対して自分が抱えている非知を自覚せよと迫ることなのだろうか。

「王様は裸だ」と叫びさえすればよいのだろうか。しかし事態はもう少し複雑である。というのは第一に、そのような指摘は逆に自身が環境問題に関する正しい対処方針を知っていると称しているのだから、やはり知を自称していることになる。自分は非知の知をもっている、つまり知らないということを知っているのだから、知っているとはいんでいる連中よりも物事をよくわきまえている、と。しかしそれもまた知の自称にすぎず、独自の非知を産み出さざるをえない。第二に、「特定の観点から語られた環境／環境そのものの」という食い違いは、つまりは非知は、それ自体として存在するものではなく、むしろ語られることによって初めて生じてくるのである。したがってこの差異について論じようとする者は、環境に関するさまざまな議論をむしろ推奨し育成しなければならぬのである。

知は自身の非知を知らねばならないとしても、そのことによって語りえなくなるわけでも、よりよく語りうるようになるわけでもない。知は常に、自分があたかも知っているかのように語り続けざるをえない。その意味で、ルーマ

ンが好んで引くバルタサル・グラシアン（一六〇一—一六五八）がいうように、偽装（dissimulatio）は知にとって不可欠の要素なのである。環境問題をシリアスに受け止めつつも、そうする自分をシリアスに受け取ってはならない。しかしまた、「シリアスに受け取っていない」という状態に安住してはならないのである。

環境問題はわれわれの知の布置全体に対して、大きな方向転換を迫っているように見えるかもしれない。しかし常に方向転換を求めると自体が、近代的な知の布置そのものの産物に他ならない。何かひとつの手（move）によって一挙に地平が開けることなどありえない。たとえそれがいかに画期的に見える「学際的」な試みであっても同じことだ。むしろ環境問題は今日においてますます切迫したものになりつつあり、不断の対処が不可欠になっている。しかしあらゆる対処は、その前提となるあらゆる知は、それ自体としてまた非知を、不透明さを産み出していく。したがって何らかの知的転換によって最終的に透明さに到達できるとは考えるべきでないだろう。しかしにもかかわらず、というよりもむしろそれゆえに、われわれは常に語り続けなければならない。透明さに達すればそこではもはや、なすべきことがなくなってしまおうだろう。

したがって、「非知のエコロジー」の結論はこうである。「透明性は非生産的かもしれない」（『近代の観察』一六〇頁）。

# 環境問題と「文理融合」

松井 健

(東京大学東洋文化研究所教授)

複雑巨大な問題を前にして

このほど東京大学出版会から刊行された『島の生活世界と開発』という全四巻のシリーズは、日本学術振興会未来開拓学術研究推進事業「アジアの環境保全」のひとつのプロジェクト「開発が地域社会に及ぼす影響とその緩和方策に関する研究」の成果である。「アジアの環境保全」全体は、私たちのものを含めて、いくつもの並走するプロジェクトからなっていて、その間でも全体とりまとめのための議論が何回もおこなわれた。こんなおりにには、必ずといってよいほどに「文理融合」が、理念として、方法として、本音として、話題にのぼった。グループ間であれ、個人間であれ、環境(問題)というような大きな研究対象そのものが文と理の区別以前の、複雑で巨大なかたまりをなしているときには、文系専門家と理系専門家、文系専門領域と理系専門領域が協調協力しなければならないのは、あまりに当然のことであり、ほとんど論じるまでもないことであ

った。当然、議論は表向きは、いたって正統な理想論となつたが、すくなくとも私は、何か釈然としない印象から抜け出せなかつた。

こうした議論では、文系と理系という二つのはっきりと分かれた分野があつて、研究者はそのどちらかに属する専門家であることが大前提となっているように思われた。そして、文理融合は、環境問題というような文理両分野にまたがるテーマのための、ごく戦略的な対処とみなされているように感じられた。文理融合のイメージは、どちらかというところ、既存の文系のある学問分野と、理系のある学問分野との同一の課題への両面からの近接というものであるらしく感じられた。

はたしてこのようなイメージで、文理融合の成果をあげることができるのだろうか。すくなくとも、環境問題のような複雑巨大な課題に接近するために、個別の専門分野にこもってはいは駄目だという実感からすると、この文理の



接合ではたして、大きな成果があげられるのか、危惧しないではおられない。

単なる文系専門領域と理系専門領域の協力というのではなく、むしろ、文理融合によって、文系でもなく、理系でもない、現実には即した対象の拡大や新しい方法論の構築がおこなわれないと、複雑巨大で対処を早急に迫る今日的な問題に学問は対応できないのではないだろうか、と漠然と考えられた。こうした感想には、私自身のすこし不規則な学問遍歴がかかわっているのかもしれない。

### 文理漂流の体験から

私自身、京都大学理学部とその大学院に四年間在籍したおりに、理系研究者となる基礎的教育の一環として、「アジアの環境保全」の推進委員会の委員長であった川那部浩哉助教（当時）の生態学、亀井節夫教授の地史学、日高敏隆教授（現・国立総合地球環境学研究所所長）のエソロジーの集中講義、岩槻邦男助手（当時）の植物実験材料の実習やシダ植物についての洋書講読、もちろん恩師となつた伊谷純一郎先生（故人）のチョークとタバコをとり間違えないかと思われる「せわしない」人類学や霊長類学の講義などを聞くことができ、今も、その「知の饗宴」というべき授業の場面のいくつかを鮮明に想い出すことができる。紛争後、学部における学科学分属はなくなっていたので、ほかにも、友人の影響があつて、数学基礎論やら論理学を、

わからぬなりに勉強した。当時流行し始めていた構造人類学とレヴィ・ストロースについては、どんな文献でも入手できるかぎり読もうとしたし、伊谷先生の授業のなかにでてくる文化人類学や社会人類学関係の学説や文献については、自分でより詳しく勉強した。文系についての講義は、教養時代の河野健二教授（故人）、私の助手時代に京都大学人文科学研究所所長）の経済学入門や、たしか国語学という科目だったかと思うが、柳田国男についての授業のほか、フランス語の大橋保夫教授（故人）の厳しい語学授業が思い出に残っているし、レヴィ・ストロースの『野生の思考』の講読にフランス語フランス文学の大学院生に混ぜて加えていただいた。ちょうどその頃、山口昌男の『未開と文明』という訳編者が出版され、この本とその文献表は、われわれ世代の、東京大学や東京都立大学で、正規の文化人類学、社会人類学の大学院コースのあるところ以外で学んでいた人類学志願の学生に大きな影響があつたものと思う。簡単にいえば、理学部の学生、院生としてではあつたが、このように文と理を行き来しながら、私は正規のコースにない人類学をやらなくてはならなかった。博士課程二年で私は京都大学人文科学研究所西洋部の助手に採用されて、形式的には、理系から文系へ移ることになる。

### 越境の志

おそらく、このように、修行時代に文と理を往還した研

研究者は、けっこういたことと思われ、私より上の世代の文化人類学者では、けっこうそのような人が目につく。私のようなものには、文理融合の正統な論議には、明らかに大きな前提の欠陥が感じられてしまう。それは、発言している人たちのほとんどが、文か理か、のどちらかの立場に立って、文理融合の必要性は論じるものの、本人は文か理のどちらの守備範囲にいて、その論理から一步も出ようとしないところである。理系の研究者の誤りは、文系の学問は口先だけでどうにでもなると思っているところにあり、文系の研究者の誤りは、理系は実験であれ形式科学であれ、痛切な今目的問題にかかわらないと考えている、というように、そのような本音の悪口を言いあうことだけが必要だといっているのではない。むしろ、研究者個人のなかに、理系方面と文系方面の両方にかかわる目標設定、研究方法、成果についての知識を自分のものにしたいたいという強い意欲がないように思われることが、もっとも大きな問題であろう。もちろん、今日とくに忙しい一定年齢以上で、それなりの役職をもつ研究者にそれは容易なことではなからう。

文系の研究者でも、環境との関係でよく、動植物の学名を書く人がいる。しかし、ほとんどの人が、ラテン語の学名と標準和名がどういうものであるかを知らないようだ。属名と種名をラテン語で書くときには、イタリックにするという作法すら守られない。時代が変わると、この学名も変化し、命名者名もかわり、ときには、別属に移ったりす

るのがなぜなのかは、まったく理解の外のように見える。標準和名についての理解もそのようなものである。しかし、それでも、学名が使われる、まるで何かの呪文のように。こうした文系研究者は、環境という自然にごく密着した分野を研究対象としながら、生物の分類や命名について、リンネ以来おこなわれてきた博物学と生物学の歴史を知らないし、知ろうともしていないのである。これは、きわめてシンボリックなことではないだろうか。環境の研究者が、学名についての関心を欠いていて、動物や植物そのものについて十分な興味をいだくはずもなく、そのような研究者が環境を「研究」するということには、明白な欠落が生じるだろうと懸念するのは私だけではあるまい。

文と理を漂流するという経歴をもたなかった人にとって、若い頃にこの両方の基礎的なトレーニングを受けていないことは、決定的に不利だということはあるが、しかし、とくに環境というようなテーマにおいては、個人の、越境しようとする強い意欲がないかぎり、文理共同研究の有効性はまったくおぼつかない。「私の専門としております、××学では」というのは、ほとんどナンセンスに近い。××学が、環境にかかわる問題系への有効なアプローチを約束しているわけではない。むしろ、こうした××学は、適切に抽象化された対象を設定し、そのための方法をつくり、その枠内でのみ対象を調理して、これまでその腕前を競ってきたから、二一世紀になって、学問のほとんどが現

実から遊離して、ほとんど好事家の閑なたわごとになってしまったのではなかっただろうか。二〇世紀も末になってからは、環境（問題）だけではない、国際的な政治や経済の問題について、学問が有効な視座を提示しえた例をみないのではないだろうか。

### 学問批判から二一世紀型のアプローチへ

理系か、文系を問わず、まず、既製の学問体系の全体が構えている、対象の限定と純粹化、方法の選定といった約束事を明らかにして、それを批判的に乗り越えないと、環境問題というような、私たちがそのなかで生きていかななくてはならない現実の複雑怪奇な巨大問題を扱うことはできないであろう。そして、おもしろいことに、文と理の間を往還することによって、この批判的視座は、より容易につくられることであろう。というのは、それぞれの学問分野の構えている約束事は、この二つの分野で、かなり質が違っているからである。

おそらく、専門分野のなかには、多くの約束事があって、それをよく知っているのが専門家であり、そのなかで研究蓄積を積み上げることが、これまでその学界でもっとも重視されてきたであろうが、これから現実に生起する二一世紀的な問題へのアプローチのためには、とにかく、どのようなかたちからであれ、狭い専門領域を越えた文理融合が、実践されなくてはならないだろう。実際の文理融合は、本

当のところは、研究者各自が、自己の専門分野の狭さについて痛切な意識をもって、程度はいかにあれ、文理の両方を「自分でやる」以外にはないのではないだろうか。

一人でそれをおこなうことが、前述のように困難だったら、日常的に文理両方の分野の研究者が参加している研究会で、興味もてるテーマをにかけているものに、とにかく参加してみることもよいであろう。若い研究者は、とくに、このような機会を積極的につくるべきだし、自分ではもう無理だと思ふ年配の研究者は、若手のためにそういう機会を用意、あるいは配慮することが必要であろう。文側であれ理側であれ、既製の学問は、とり出してきてくっつけて文理融合になるだけの柔軟さをもうすでに失っている。この自己認識があれば、なぜ、個々の研究者が自ら文理融合することが必要なかは、ほぼ、自明のことのように思われる。むしろ、文であれ理であれ、二〇世紀の学術研究において専門領域とみなされてきたものが、それほどに狭く、研究者側の都合から、純粹な（現実から離れて、現実に交差関与する事項のすくない）研究対象を設定して、ここ二〇年ばかりの間にあまりにも複雑巨大化した身近な現実問題から離れてしまい、かつ、自分たちが勝手に設定した対象と方法のなかに自閉してしまっているかを知ることのほうが、本源的な問題なのではないか。かえって、その批判に新しい学問の芽がみられるのかもしれないが。

# 古書のある

## 風景

「こじよのあるふうけい」

書物を数える単位としては、通常「部<sup>ゴロ</sup>」という言葉が用いられる。書物というものは、それが印刷本である限りは複製品でありコピーであるという、グーテンベルク以来の事実が、その言葉にしっかりと刻み込まれている。書物に挿入される挿絵にしても、銅版画や木版画という版画である以上は、これもまた基本的に大量生産品であり、コピーである。印刷刊本に関しては、挿画も含めて、印刷<sup>プリント</sup>と複製の区別は意味を成さないようだ。

しかし、十八世紀の書物には複製品としての書籍の系譜から逸脱する要素がまだまだ含まれている。それが手彩色版画という存在である。十八世紀にはカラー印刷の技術が発明されていなかったために、線描のみの銅版画に職人が水彩で一つつい色付けを施すことで、彩色図版が作られていた。これが手彩色と呼ばれる手法である。元になる版画そのものは複製品であるが、それに色を塗る段階で、職人の「手」の技が加わり、一点一点の仕上がりが微妙に異なってくる。複製であるはずの印刷本に、こうして再び工芸品に傾斜していく要素が付加されることになる。

この手彩色版画を手に入れてみようと思ったのは、イギリス美学のことを調べている過程のことであった。イギリス美学では、「美」と「崇高」と並んで、「ピクチャレスク」という概念が重要な役割を果たしているのだが、その正体がどうにも見究めがたい。ピクチャレスク風の風景画なるものも、研究書などに複製が挿入されていることがあるが、それを見てもどうにもその核心が判然としない。そして、この図版がほかならぬ手彩色で描かれたものだと知ったことで、いよいよその「現物」を手に入れようという意欲に火がついた。具体的には、ピクチャレスク美学の実践として有名なウィリアム・ギルピンの著作を捜すことになった。

「ラスキンの時代に先駆けてラスキンの仕事を始めた」と言われるギルピンは、

2  
フェル  
面沙の向こうの廢墟

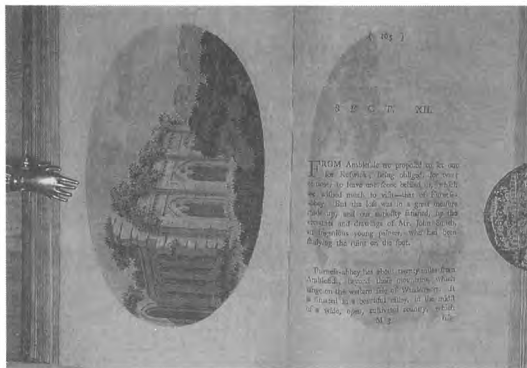
村井 則夫

撮影：別宮幸徳

Alpha 100, Kern Macro-Switar 1:1.9 f=80mm, Konica SR14



右：英国十八世紀美術の関連書。  
 ピクチャレスク論の代表格であるU. プライ  
 ス『ピクチャレスクの原理』（初版、  
 1794年）／W.ギルピンの『ピクチャレスク  
 論』（初版、1792年）／R. P. ナイト  
 『趣味の原理』（第二版、1805年）など。



左：W.ギルピンの著作の一部。  
 反対側の本文頁に「色移り」（オフセット）  
 の跡がはっきりと確認できる。

このピクチャレスク関係の書物を手にして気づいたことがある。これらの手彩色の版画は、あとから色を乗せているために、長い年月のあいだに反対側の頁にその色がかなり鮮明に移ってしまっている。古書店主に尋ねると、この時代の手彩色本では避けられない現象だそうである。最初はその状態を残念に思ったが、印刷技術という面から見るとこれはなかなか示唆に富んでいるということにも気がついた。それというのも、反対頁へのこの転写現象は「色移り」と呼ばれるのだが、考えてみればこの原理こそが、オフセット印刷として二〇世紀以降のカラー印刷の主流となったものだからである。後に二〇世紀の印刷業者ラブルが偶然のことから発見し、大量生産に道を開くに至るこの技術が、完全な複製の効かない十八世紀の手彩色図版のうえでささやかに予言されているといったところだろうか。古書の実物は思わぬ連想の輪を拡げてくれるようだ。（明星大学専任講師）

十八世紀の旅行ブームの波に乗って、旅行ガイドの体裁でワイ川や湖沼地方などの地誌を記し、手彩色の挿画を入れた書物を何点も公刊している。その手彩色の風景画では、楕円の中に穏やかな風景や、人影のない廃墟の光景が描き込まれ、しかもその全体がほんのりとセピア色を帯びている。このセピア色こそ、版画にあとから色付けされた手彩色によるものである。けっして華やかな色彩ではない。むしろきわめて渋い色合いで画面全体が淡く覆われ、靄のかかったような独特の雰囲気を作っている。それは風景の前にかげられた一枚の面紗のようなものである。画面に漂う「空気感」とでも言うべき浮遊する皮膚アウツの感覚が、おそらくはピクチャレスク（絵のような）と呼ばれる独自の美的感性テイステイティヴの中核なのだろう。こうした雰囲気を見ると、晩年のターナーの水彩画などにも共通する感覚がほのかに浮かび上がってくる。ペブスナーが『英国美術の英国性』で語っていた「絵のように美しい英国」というわけだ。このような独特の質感が印刷による複製では伝わってこないのも無理はない。

## 武蔵野音楽大学 楽器博物館



江古田キャンパス楽器博物館鍵盤楽器展示室

人は音楽に何を求めるであろうか。浮世のつらさを癒すために、あるいは宗教的儀式のために、あるいは精神を昂揚させるために、愉快なひとときを過ごすために。とにかく洋の東西、そして時代を問わず、人の心を揺り動かすことができるものの一つが音楽であることは確かである。

その音楽を奏でる楽器は読んで字のごとく「楽しむ器」である。

武蔵野音楽大学楽器博物館は、一九六七年一〇月にスタートした。

一九五三年に前学長の福井直弘氏が学生の研究資料にするため、ドイツから持ち帰った一個のヴィオラ・ダモアレに端を発し、楽器蒐集が始まった。そして一九六六年に、邦楽器研究家の水野佐平氏から邦楽器コレクションが寄贈されたことを契機に、翌年正式に博物館として発足した。一九七八年には、入間キャンパス博物館が出来、水野コレクションを中心とした邦楽器・竈管機・蓄音機、弦楽器工作具類など一〇〇〇点が展示されている。現在、パルナソス多摩の展示室を加え、同博物館としての所蔵資料は、楽器は言うに及ばず、その付属品、音楽に関する装置・器具類、その他関係資料など五〇〇〇点にのぼる。

今回は江古田キャンパス博物館の方を訪ねた。

決して大きくはない建物であるが、その一〜三階までいくつかの部屋に分かれ、地域別に分類・展示されている。先ず入ってすぐの一階は一部屋のみで、鍵盤楽器展示室でなかなか圧巻である。現代のピアノに至るまでの、ヨーロッパの鍵盤楽器が肩を寄せ合うようにして納められている。筆者のつたない知識でも知っている、ピアノの幻の名器といわれるプレイエルを、早速探し回ったら……ありました！実に堂々とした堅牢なつくり、一方では彫刻、塗りや金箔などの配色・模様などは贅を尽くした格調高い風格。ここで立ち止まっていはいけない。次の部屋へと進もう。二階に行くとも西洋管弦楽器の部屋がある。ここでは一〇世紀頃に登場したハーディ・ガーディという、ハンドルを回して弦を擦って音を出す楽

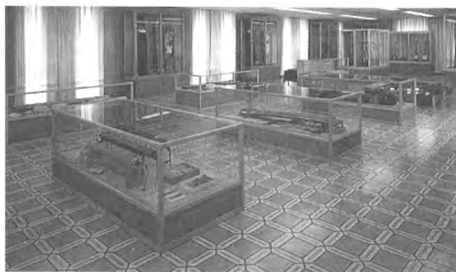
所在地 江古田キャンパス  
 (入間キャンパスは下記URLで)  
 東京都練馬区羽沢 1-13-1  
 西武池袋線江古田駅北口下車

公開日 毎週水曜日 10時~15時

入館料 無料

電話 03-3992-1410(直)

URL <http://www.musashino-music.ac.jp>



入間キャンパス楽器博物館邦楽器展示室

器が面白い。後に大道芸人たちに使われるようになったらしい。またここには、弦楽器の名弓コレクションの一部が展示されている。三階へと歩を進めよう。ここは、西洋以外の各地域のしかも民族色の強い楽器群が、地域別に展示されている。東洋、インド、アラブなどの楽器を見てみると、そこに西洋近代楽器のルーツを感じさせる。それらは「鳴り物」という楽器本来の原初的役割を喚起させる。そういえば筆者が訪れた日もホルンなどの管楽器の練習音が鳴り響いていた。

このコレクションの素晴らしいところは、音楽・楽器と言うと、とかく西洋楽器のみを連想しがちであるが、この博物館ではヨーロッパのそればかりではなく、アジア、アフリカ、インド・アラブ、中南米、そして邦楽器などの世界各地の伝統楽器、民族楽器が蒐集されている。

いただいたカタログから引用しよう。「感情や感動を心から心へ伝えるのが音楽の本質である。しかし、特にヨーロッパの楽器は、圧倒的な効果を追求した結果、機能的、超絶技巧の確立が要求され、その結果、目的達成のため余儀なく機械的な訓練という足枷をはくことになってしまった。つまり、現代の楽器を通しての音楽の研鑽には、音楽の原点である人の心を動かす部分と、機能的な技術の習得の部分とが、欠くことのできない両輪として要求され、この両者のバランスが大前提となっている、と言い換えることができる。」そしてそういうものの方で見ると、クラシック音楽と西洋近代楽器の歴史は、たかだか一八世紀くらいからのなしである、と言うことに今更ながら気付かされる。

惜しむらくは、江古田のキャンパスは、スペースに限界があり、展示品が窮屈そうに並べられており、展示品の種類も限られてしまうことである。ますます入間キャンパスの邦楽器展示室も見てみたくなる。

行かれる方は、江古田キャンパス、入間キャンパス、どちらの博物館からでも。

(専修大学出版局 高橋泰男)

# 大学出版部ニュース

## ▼創立四〇周年を経て新たなスタートへ

日本大学出版部協会二〇〇四年度通常総会および部会・懇親会が、四月二十八日にアルカディア市ヶ谷で開催された。総会には二四大学二七名が出席、他に三大学七名がオブザーバーとして参加した。渡邊勲幹事長（東京大学出版会）の開会挨拶に続き、裁原敏郎幹事（産能大学出版部）を議長に選出して議事が進んだ。昨年は協会の会則改定・名称変更や、創立四〇周年記念講演会および感謝の会開催などがあり、その活動報告と決算が承認された。続いて二〇〇四年度の事業



渡邊幹事長の挨拶

計画・予算案の審議と承認、役員改選等が行われ、また入会申請された二校についても審議の上、全会一致で承認された。総会終了後、編集・営業・電子・国際の四部会が開かれた後、懇親会に移り、二五校八〇名（協会顧問二名を含む）が出席した。初めに渡邊幹事長から「創立四〇周年という節目を経て、今年は協会再スタートの年でもあり、転回期ともいえる現在を乗り越きつていこう」との力強い挨拶があった。

山下正顧問の乾杯の発声で開宴となり、会場のおちこちで歓談の輪が広がっていた。新入会出版部の挨拶の後、恒例の新部会長の抱負などが続いて、賑やかな微酔のひとつときがすぎたから、閑野利之顧問の中締めにより、お開きとなった。

## ▼新規会員二校の紹介

聖徳大学出版会

代表 川並弘昭（聖徳大学理事長）

設立 平成一四年九月

武蔵野美術大学出版局

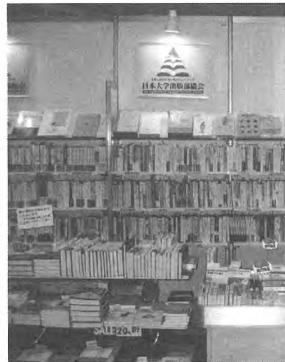
代表 小石新八（武蔵野美術大学教授）

設立 昭和五八年三月

## ▼東京国際ブックフェア二〇〇四

四月二二日から四日間、有明の東京ビッグサイトで、東京国際ブックフェアが開催された。恒例の図書展示即売や専門セミナーなど、多彩なイベントが催され、「趣味・実用・旅」の新設コーナーや、読書専用端末の可能性、デジタルコンテンツなどの議論が話題を集めた。

一方、大学出版部協会のブースでは、初めての試みとしてモニターを設置して、昨年一月からTFMインタラクティブが配信している書籍紹介の映像を放映した。ブース来場者は六五〇〇〇人を越え、書籍販売は五三三冊、一四八万円の実績をあげた。



協会の展示ブース



## 北海道大学図書刊行会

▼赤司道和著『19世紀パリ社会史』（A5判・四七二五円）一八一五〜一八六〇年、フランスが近代市民社会確立への地歩を固めつつあった時代のパリの労働者の労働と日常生活の諸相を、労働者家族を分析軸に検討する。復古王政期以降の救貧家族政策を工業化の進展過程で顕在化した社会対立の深化の中で捉え直す。文学研究科叢書5

▼菊池俊彦著『環オホーツク海古代文化の研究』（A5判・四九三五円）オホーツク海を取り巻く地域の歴史的・文化的結びつきが近年明らかになれつつある。ロシア語・中国語文献をも駆使して、オホーツク海周辺地域の諸民族の歴史と文化を明らかにし、交易や朝貢などを通じた諸文化相互の交流を究明する。文学研究科叢書6

▼石塚喜明著『日本の農業・アジアの農業』（四六判・二一〇〇円）日本農業研究の最長老の一人である著者が広い視野から、いまなお若々しい問題意識で後進に贈る激励のメッセージ。前著『生命を支える農業』に続き、日本の農業と発展途上国とくにアジアの農業の過去と現在、そして未来についての根底的な問題を平易に語る。

## 東北大学出版会

▼鈴木善弘著『種子生物学』（A5判、四一一頁、四二〇〇円（税込））植物の進化の過程で形成され、種が存在、生活環のなかで重要な役割を担っている種子については、以前からその重要性が認識され、多くの研究が行われてきた。本書は、種子の形態と機能、種子形成、種子の発育と発芽力の生成、休眠と発芽の生理・生態、寿命などの一連の関係をとり上げ、著者の永年の研究と多くの文献を参考にして論述し、そこに存在する法則性を探っている。▼池谷和信著『山菜採りの社会誌―資源利用とテリトリー』（A5判、一二〇頁、一三二〇円（税込））著者は、東北日本海側の多雪地帯で、ゼンマイ採集の実態を、地元の山菜採りに弟子入りをして採集活動を行い、詳細に観察・記録した。本書は、フィールドワークに基づいた生き生きとした描写に加え、自然資源の持続的な配分を可能とするテリトリー制の動態をポリティカル・エコロジーの視点から解明したところに特徴がある。環境と人間との関係に関心の強い地理学、人類学、社会学などの読者にとって必読の書。

## 流通経済大学出版会

▼角本良平著『自滅への道―道路公団民営化Ⅱ』（三二五〇円）

小泉改革の目玉の一つであった「道路公団民営化」は完全に失敗に終わった。このことについて、北沢栄氏は「道路公団改革を腰砕けにした小泉首相の罪（エコノミスト二〇〇四・一・二〇）」で次のように指摘している。「小泉流の丸投げ手法が、改革意欲に欠ける担当大臣のもと、官と族議員による改革案の骨抜きをもたらしたといえるだろう。とはいえ、首相の『丸投げ』がもたらす『骨抜き』の危険を、首相自身が見抜けないはずはない。となると、首相の暗黙の承認のもとで、改革案が骨抜きにされた疑いが浮上する。：骨抜きの結果、官僚主導の新たな仕組みができあがってしまっただけに、深刻な後遺症を引き起こす。…ここに『小泉改革』の幻想と国民の期待を裏切る罪がある。」

本書は、推進委員会の「最終報告」から本年三月までの政・官の動きを詳細に追跡しており、第一部の『道路公団民営化』と併せてお読みいただければ、現政権の行政改革への取組みの実態が浮き彫りになるだろう。

## 聖学院大学出版会

▼康仁徳・小田川興編著『北朝鮮問題をどう解くか——東アジアにおける平和と民主主義のために』(A5判、税込価格二九四〇円)

北朝鮮問題は、東アジアに大きな緊張と危機をもたらしている。核開発、拉致問題、食糧、燃料援助問題など、さまざまな問題が複雑に絡み、また歴史的な問題、国家体制の問題などが重なり、解決を難しくしている。この北朝鮮問題をめぐって南北、日米中ロの六カ国による包括協議が進められている。しかし、この六カ国協議はこの地域に平和の新たな枠組みをつくることができるのか。また拉致問題はどのように解決できるのか。

日本は明確なビジョンを持ち、重要な役割を果たすことが求められているが、どのような解決の方向を提示できるのか。本書は、元大韓民国統一部長官の康仁徳氏と元朝日新聞編集委員の小田川興氏を編者に、伊豆見元、小此木政夫、和田春樹、李鍾元、遠藤哲也氏など、朝鮮半島問題の専門家による論考を通して、これらの緊急かつ重要な課題に取り組み、平和的解決の筋道を検討するものである。

## 聖徳大学出版会

▼この度、聖徳大学出版会が日本大学出版部協会に入会させて頂くことになりましたこと、心より御礼申し上げます。今後とも宜しく御指導、御鞭撻のほどお願い申し上げます。

▼村井靖児著『音楽療法を語る——精神医学から見た音楽と心の関係——』(四六判・二八〇頁・二一〇〇円)

小会刊行第一作目となる本書は、近年話題の「心と身体の癒し」がテーマ。私たちは日常生活において、ストレス等を抱え、病にかかるともあります。しかし、その治療法は種々あるため自分に合った治療法を見つけないけません。心と身体を治癒する方法として私たちが日頃親しんでいる音楽を用いた音楽療法をご存知でしょうか。その音楽療法の第一人者である著者が音楽療法の理論、心身と音楽との関係を解き明かしています。音楽療法の本質をつかむための専門書としてはもちろん、入門書としても活用して頂ける内容となっています。本書をご一読いただき、音楽が心と身体に安らぎを与えるためのお力添えになるよう願っています。

## 麗澤大学出版会

▼中村元著『中村元が説く仏教のこころ』(四六判並製・一〇五〇円) 釈尊は言う「何人も他人を軽んじてはならない。互いに他人に苦痛を与えることを望んではならない。この慈しみの心づかいをしつかりと保て」。この慈しみの心こそ釈尊の悟りである」と著者は言う。中村元仏教講話シリーズの第三弾。

▼細谷直樹著『深読みの力——大人のための古典読解』(四六判上製・一六八〇円) 古典を悠々と、じっくりと読み味わう。これぞ快樂の極み。中世文学の碩学による「大人のための国語教科書」。

▼法頂著『河野進訳「すべてを捨てて去る」』(四六判フランス装・一六八〇円)

「あなたは、今どこに向かっているのか」——韓国の高名な禅僧にしてベストセラ―作家の珠玉の随筆集、全六三篇。



『中村元が説く  
仏教のこころ』  
定価 1,050円

## 慶應義塾大学出版会

- ▼シリーズGISEE Eyes 葉師寺泰蔵編著『グローバル・セキュリティ入門』(二二六〇円)、吉野直行編著『アジアの金融市場』(二八九〇円)、小此木啓吾・濱田庸子・山田康著『次世代を育む心』の危機』(二八九〇円)、竹内勲・中谷比呂樹編著『グローバル時代の感染症』(二六八〇円)、井手亜夫編著『アジアのエネルギー・環境と経済発展』(二一〇〇円)、橋本芳一・関根嘉香・王雪萍著『中国の空 日本森』(一八九〇円)。大学初の本格的シンクタンクを目指す慶應義塾大学グローバルセキュリティ・リサーチセンター(GISEC)における研究プロジェクトをもとにした啓蒙書シリーズの第一弾。現代の様々な局面での危機管理に関する問題をグローバルに捉えてわかりやすく発信する。
- ▼権丈善一著『年金改革と積極的社会保障政策―再分配政策の政治経済学Ⅱ』(三三六〇円) 従来の批判に経済理論的根拠を示し、消費税・相続税に焦点を当てた極めて独自性の高い画期的改革提言。
- ▼藤澤益夫著『長寿譚』(八四〇〇円) 世界の長寿譚事典ともいえる博物誌的読物。

## 産業能率大学出版部

- ▼(学)産業能率大学TM研究プロジェクト編著『テクノロジー・マーケティング技術が市場を創出する』(二二五五円) テクノロジー・マーケティングとは、テクノロジーをテコにして新たなニーズを掘り起こし、ニーズを満たす商品市場を創出するためのマーケティングと技術構成に関する考え方と技法の体系である。現在、産業の境界線は曖昧になってきている。そのため市場創出の基軸は製品を生み出す「技術」であり、技術を磨き、外部調達や技術の連携をはかって多様な市場を創出する戦略が競争優位を導くのである。本書は、産業能率大学がTMのコンセプトを確立し、種々のモデルと技法を開発、まとめたものである。
- ▼岩倉信弥著『デザイン「こと」始め―ホンダに学ぶ』(二二〇〇円) 本書は「プロダクトデザイン」とはどのようなものか、どのようにして行うのか、それが人々の生活の中でいかに大切なものであるかを、本田宗一郎から直接薫陶を受け自動車のデザインの第一人者である著者が詳説する。

## 専修大学出版局

- ▼専修大学今村法律研究室編『今村力三郎訴訟記録33 虎の門事件(一)』(四三八四円) 今朝撰政宮殿下の行啓途中に、一凶漢がお召車に発砲し窓ガラスを破損せるも…、と当時の朝日新聞に報じられた本事件は、言論の自由への抑圧という歴史の流れを決めた一連の事件の一つである。本巻には「特別事件記録之主要調査(検証調査、難波大助聴取書、証人訊問調査など)」を所収している。
- ▼佐藤雅男『小林秀雄 創造と批評』(二九四〇円) 小林秀雄の批評とは何だったのか。それは古代ギリシア哲学のミメシスの性質、世阿弥「花伝」の「物学」の手順・方法に溯ることができる。本書は、小林の「創造的批評」における方法意識の特質を、〈模倣〉〈宿命〉〈自発〉〈実験〉などの概念を中心に読み解いたものである。附論に「花伝」の方法を収録。
- ▼佐藤潤一『日本国憲法における「国民」概念の限界と「市民」概念の可能性―「外国人法制」の憲法的統制に向けて―』(五八八〇円) 外国人の「権利」について究明した憲法論である。イギリス法を比較に出し「居住市民権」を提唱している。

## 大正大学出版会

▼伊藤淑子著『家族の幻影―アメリカ映画・文芸作品にみる家族像―』四六判〔定価二二〇五円〕T.U.選書②

「家族とは何だろうか」家族のあり方は千差万別であるのに、家族という言葉を聞いてそれぞれが共有できるイメージを描くことができるのは何故か。私たちの家族体験はかぎりなく個人的なものであるはずなのに。

家族のイメージは、政治的、歴史的、文化的、社会的、経済的要因が重なり合って形成されたものに過ぎない。さまざまな問題の原因を、家族の機能が失われたからという声もあるが、家族が健全さを取り戻せば問題は解決するのか。アメリカ的な社会の構築を範としてきた日本。時代の変化にさらされながら、普遍であるのかのように幻想されがちな家族の規範を、アメリカの映画や小説がどのように捉えてきたのかをたどり、私たちの意識にどのような家族のイメージが構築されてきたかを考える。

## 玉川大学出版部

▼久野弘幸著『ヨーロッパ教育 歴史と展望』(六五二〇円)ヨーロッパ意識の形成と多様なヨーロッパ人の育成を目指すヨーロッパ教育は各国の教育の中でどのように位置づけられるのかを、ヨーロッパ教育の歴史と実践事例から説明する。

▼杉江修治他編著『大学授業を活性化する方法』(二九四〇円)学ぶ意欲を高めようという取組みが増えてきている。自分のめざす授業にあてはまる教授法がないという大学教師にも応用可能な授業の事例を、それを着想した根拠を含め解説

▼定松正著『イギリス児童文学紀行』(二二〇〇円)各地の伝説、風土を題材にしたものが多いイギリス児童文学。作家が描いた地方と歴史を訪ねて、物語の背景や意味をたどる。作品の面白さを再発見するきっかけを与えてくれる本。

▼O・チェックランド著／加藤詔士、宮田学編訳『日本の近代化とスコットランド』(四七二五円)日本の近代化の基礎を築く手助けをした多くのスコットランド人。ダイアーやブラントンらの優れた仕事や、河鍋暁斎、竹鶴政孝ら、日英の交流に貢献した日本人の足跡を描く。

## 中央大学出版部

▼斉藤孝著『記録・情報・知識』の世界―オントロジ・アルゴリズムの研究』(三一五〇円)オントロジ・アルゴリズムと呼ぶ知識の獲得と表現モデルの研究について総合的に解説する。

▼石川利治著『空間経済学の基礎理論』(二五二〇円)長い時間をかけて産業全体の基本的立地構造を構築してきている経済活動の立地に焦点を絞って、理論的な立場から分析する。

▼小島武司著『CIVIL PROCEDURE and ADR in JAPAN』(五五六五円)現代日本の司法改革及び訴訟手続改革の源流とその方向性を動態的に示し、日本社会における法の支配の未来像を占う手がかりを提供する。

▼百瀬泉監修『シェイクスピアは世界をめぐる―各国における出会いと再創造』(二九四〇円)「世界劇場」発信者シェイクスピアを徹底説明する。第一級の専門家により新次元を開示する。

▼細野助博監修『実践コミュニケーションビジネス』(二五二〇円)手づくり感覚でコミュニケーションビジネスを実践した人達の体験から、まちづくりの意識改革を促す。

## 東京大学出版会

▼歴史学研究会・日本史研究会編『日本史講座』（全一〇巻・各二二一〇円）刊行開始

歴史学、とりわけ日本史学は、近年大きなうねりのなかにおかれているといってもよいだろう。なによりも「日本」という自明の対象をもつかのように「日本史」学を考えればよい時代は去っていった。遺跡捏造事件は考古学・歴史学の研究方法のみならず、学問と社会とがいかにか切り結ぶべきかということまで見直しを迫った。歴史叙述のあり方をめぐってはいくつもの議論が重ねられている。

この講座はこうした動きをしっかりと受け止め、新しい「日本史」の創造を目指すものである。しかし、それは戦後歴史学が重ねてきた模索を投げ棄てることから始まるのではない。その営為を現代の地平から確実にかつ批判的に継承していく、遙かな過去のなかからも現代につながる問題を見出し、より多元的な「日本史」像を描き出す。

歴史学に志す読者、とくにその世界に一步を踏み出そうとしている若い読者に読んでいただきたい。

## 東京電機大学出版局

インターネットをはじめとする情報技術の普及により、情報の流れ方・とらえ方・発信の仕方に新たな展開が生じている。今日の情報化を、情報技術の発展を推進力とした社会・経済的動向とみなし、情報技術の仕組みを理解するとともに、効果的な情報発信を行っていく必要がある。情報技術を生産と発信それぞれの視点からとらえ、わかりやすく解説したテキストを紹介する。

▼本多満正他編著『実践情報科教育法―「ものづくり」から学ぶ』（二二二一〇円）

大学教職科目「情報科教育法」のテキスト。情報技術の発展を支える「ものづくり」の重要性に着目し、ものづくりの視点による情報教育を提案。情報技術のしくみと労働のおもしろさをつかみとらせるための教育実践例を豊富に掲載。

▼永崎研宣著『文科系のための情報発信リテラシー』（二二五二〇円）文科系の学生や研究者が、調査・研究等の情報をインターネットを用いて発信していく際の手引。WWWの基礎技術や法的・倫理的問題、留意事項等を解説し、人文科学系のウェブサイトを構築事例も豊富に紹介。

## 東京農業大学出版会

〈カラー写真集100シリーズ〉

▼『北の大地の生物生産―100の挑戦―』東京農大生物生産学科編

北の大地のオホーツク。そこは生物生産の有用資源の宝庫だ。植物・動物・水圏生物の資源を用いた研究教育の一〇〇の挑戦を紹介。意外な世界を垣間見ることができる。誰もが「流氷の天使クリオネを食べている」という。北洋域から獲れるタラなどの胃内容物からクリオネが出てくる。そのタラはすり身の原料なのだ。

平成一五年一月／B六判  
一三六ページ／税込価格一六八〇円

▼『農業・農学の展望―循環型社会に向けて―』21世紀農業・農学研究会編

日本学術会議第六部会のメンバーがまとめたもの。まさに農業・農学の展望について専門分野の立場からポイントが簡潔に述べられている。農業・農学を考える視点を与えてくれる好書である。

平成一六年一月／A五判  
三二八頁／税込価格三三六〇円

## 法政大学出版局

- ▼『イラク戦争と明日の世界』（T・トドロフ著／大谷尚文訳・四六判・一五七五円）米英によるイラクへの軍事介入を新原理主義者による独善的強制として退け、欧州の価値観に基づく権力の多元化を実現するために、欧州連合は再軍備してアメリカの世界戦略と対峙すべきと説く。自由と民主主義を探究する著者が新たな世界秩序を洞察する緊急アピール。
- ▼『里山』I・II（有岡利幸著・四六判・各二九四〇円）日本の原風景をなす里山は、古くから信仰の場であり生産活動の場であった。縄文時代から続く里山の変遷を生活史として描き出し、さらに地租改正による山林所有者の変遷、戦争による荒廃、木材輸入自由化による空洞化の経緯を辿り、里山の現状と未来を語る。
- ▼『英国の庭園——その歴史と様式を訪ねて』（岩切正介著・A5判・五四六〇円）陰影に富み、繊細で自然を感じさせる英国の庭園を愛する著者が、自ら訪れた数多く庭園の中から三〇余についてその魅力を語り、造園を命じた王侯貴族、庭師たちのエピソードをまじえつつ、庭園の様式や作り手の変遷をあとづけ。

## 放送大学教育振興会

- 平成十六年四月より開講中の放送大学の学部授業科目から主なものを紹介する。
- ▼『光電子技術とIT社会』（西原浩編著）：膨大な通信データを運び、世界を瞬時に結ぶ海底ケーブル網が実現したのは光ファイバー技術の飛躍的な発展の成果である。二十世紀最大の発明といわれるレーザー光を中心に光を応用した電子技術の今を俯瞰する。
- ▼『若者の科学離れを考える』（岩村秀ほか編著）：今やグローバルな問題となっている若者の科学離れの実態と問題点を明らかにしつつ、その対応策と方向性を考える。
- ▼『日本文学における住まい』（島内裕子著）：日本文学に描かれた住まいの諸相を古典から近代までたどり、そこにいるような人生観や美意識が表現されているかを考察する。
- ▼『社会福祉入門』（岡本民夫ほか編著）：社会経済の変化に加えて急速な少子高齢化は日々の生活にさまざまな衝撃を与え、従来の社会福祉施策では人々のニーズに対応できなくなった。今後の福祉の基本となる概念や理念を紹介する。

## 武蔵野美術大学出版局

武蔵野美術大学出版局は本学造形学部通信教育課程の教科書や美術・デザインをはじめ、文化と表現の諸領域にかかわるさまざまな分野をとりあげた出版を行なっております。

- ▼『現代日本画の発想』（武蔵野美術大学日本画学科研究室編・A4判・4色刷・三九九〇円）
- ▼『graphic design 視覚伝達デザイン基礎』（新島実監修・A4判・4色刷・三五七〇円）
- ▼『造形学概論』（金子伸一著・A5判・一九九五円）
- ▼『社会学のまなざし』（橋本梁司監修小幡正敏著・A5判・一九九五円）
- ▼MAUライブラリー①『ネパール周遊紀行』（田村善次郎著・四六判上製・一九九五円）
- ▼MAUライブラリー②『塾の水脈』（小久保明浩著・四六判上製・一八九〇円）



## 明星大学出版部

▼笠原順路編『地誌から叙情へ——イギリス・ロマン主義の源流をたどる』（価格三七〇〇円）

西欧近代人なるものが、所謂ロマン主義の時代に生まれたとするなら、そのロマン主義的叙情の源を、十七〜十九世紀イギリス文学で自然観照が自我意識を刺激してゆく過程のなかに克明にたどり、もって近代人の精神構造の本質に迫ろうとする。「作品編」では九編の道標となるべき作品を精読し、「批評編」で二十世紀後半の批評家の視点を検討する。これまで新古典主義という名で一括されがちであった十八世紀イギリス詩の奥の深さを浮き彫りにする。

『作品編』「クーパーの丘」（植月）／「ウィンザーの森」（里麻）／「四季」（笠原）／「挽歌」（片山）／「吟遊詩人」（吉川）／「課題」（今村）／「十四のソネット」（笹川）／「ピーチー岬」（阿見）『批評編』ワッサーマン、エイブラムズ、ウィムザット、ジリアン・ピア、ド・マン、ブルーム、ハートマン、マガンなど（大河内、樋渡、石幡、小田）

## 早稲田大学出版部

▼『グローバル社会の情報論』（伊藤守・西垣通・正村俊之編／三三六〇円）グローバルに展開する世界経済、デジタル技術への対応を迫られる特許・著作権法等を取り上げ、情報ネットワークの問題点を分析。シリーズ社会情報学への接近4

▼『歩く文化 座る文化——比較文学論』（野中涼／六〇九〇円）西欧の立俗文化と日本の座俗文化。この相違が、文学の創作過程、論証のレトリックなどに反映することを明らかにし、比較文学の新しいキー・コンセプトを提唱。新装版

▼『転換期の福祉国家——グローバル経済下の適応戦略』（エスピノーア・デルセン、埋橋孝文監訳／四七二五円）ヨーロッパ・北米・東アジア等の福祉政策を比較検討し、世界経済のもとでの福祉国家のあり方を提示する。



## 東海大学出版会

▼『アメリカ大学技術移転入門——AUTM（米国大学技術管理者協会）教本』山田清志監訳／東海大学知的財産戦略本部編訳（二四一五円）

「文部科学省・大学的財産戦略本部整備事業（二〇〇三年度）」に採択された本学（※）は、世界最大の大学技術移転実務専門職団体であるAUTMと協力し、AUTMが大学のTLOスタッフ養成用として編集した知的財産法制度と運用のための入門テキスト「AUTM Educational Series」を訳出した。米国の制度を基にベテランの専門職・弁護士・弁護士らが執筆した実務体験に基づく内容は、日本の実情に適合しない部分もあるが、産学連携、研究成果物の技術移転を試みる者には大きく示唆に富む。

■目次・発明者の特許と特許出願者手引／先行技術——特許出願人を脅かす時限爆弾／材料譲渡同意書／ソフトウェア・マルチメディアなどの著作権保護／大学におけるデジタル作品の開発と実用化

（※東海大学を代表校に北海道東海大学、九州東海大学の三大学が採択機関）

## 名古屋大学出版会

▼川島 真著『中国近代外交の形成』

(七三五〇円) 国際社会における「文明国」の地位をめざして外交官僚たちが紡ぎだした制度や政策を、当時の外交檔案を博捜し同時代的文脈の中で捉えた大作。

▼高 哲男著『現代アメリカ経済思想の起源—プラグマティズムと制度経済学—』(五二五〇円) 米国の自由主義における保守と革新のダイナミズムを捉え、制度主義を再構築した卓抜な「知」の歴史。

▼金井雄一著『ボンドの苦闘—金本位制とは何だったのか—』(五〇四〇円) 今日のマネタリズムにも及ぶ金本位制の神話的理解を斥け、両大戦間期の資本主義史に新たな展望を拓く労作。

▼長尾伸一著『トマス・リード—実在論・幾何学・ユートピア—』(五〇四〇円) リードの知的体系の総体とそれが内包する現代性を明らかにすると同時に、新しい思想史の方法を拓いた力作。

▼西澤邦秀編『放射線安全取扱の基礎 [第二版—アイソトープからX線・放射光まで—』(二二五二〇円) 必要不可欠な知識を図・写真を多用しわかりやすく解説した増補改訂版。

## 三重大学出版会

▼樋ばさみ博重著『食育のためのおもしろ栄養学』A5判一四〇頁(九四〇円+税)

第1章「食物繊維」の効果／2章 EP AとDHAの驚くべき効用／3章 ビタミンCの多様な作用／4章 ビタミンDの体内での生成と作用／5章 ビタミンEの多様な作用／6章 ストレスに強くなるための栄養／7章 乳児期にしてあげる大切なこと／8章 成長期の栄養は一生を左右する／9章 無機質の適量の摂取が大切／10章 老年期の栄養に気を付け長寿に／11章 有害な腸内細菌の増殖を抑制する／12章 肥満の原因とその予防法／13章 便秘の原因とそれを治す方法／14章 便秘による乳癌の誘発とその予防／15章 脂肪肝と高脂血症のヒトの食事／16章 純日本食は欧米人の理想食／17章 緑成分の驚くべき効用／18章 野菜・果物の摂取量が多いほど癌の発生率が低い

▼田中皓正著『起業する・ヨンキュウ』B5判二二〇頁 定価二四〇〇円(内税) 売上五〇〇億円、無借金経営、取扱高日本一の魚類販売会社の四〇年史。

## 京都大学学術出版会

▼G・パケット著『科学論文の英語用法 百科 第1編—よく誤用される単語と表現』菊判・六五〇頁・四九三五円／著者は、高名な理論物理学誌『Progress of the English』の英文校閲者。二〇〇〇篇を超える日本人の論文を校閲する中で、日本人の間にほぼ普遍的に存在する、語彙や文法についての誤解があることに気づいた。その誤解が招く表現上の問題と解決の方法を、英語理解の根本にまで立ち入って論じた、初めての本格的な解説書。例えば日本人の「on the other hand」の使い方は、ほとんど間違っている。なぜならこの表現を「はさむ二つの文は、その扱う題目が同じでなければならず、さらにその題目について異なった見方を示さなければならぬ」から。とすると「The solution of  $\phi$  is stable for  $\beta < 1$ . On the other hand, it is unstable for  $\beta > 1$ .」という、よくありそうな文章は、実は論理不明瞭。その詳しい理由は本書91章で……。about&agree、change&commonとかいった、ごく「基本的」な語に実は大きな落とし穴があることを教えてくれる、言語文化論としても貴重な一冊。



## 大阪経済法科大学出版部

▼西山井依子著『債権各論』(三一五〇円税込)債権各論を学ぶ学生たちのために、また資格取得を目指す社会人にも理解できるように、債権各論の基本的知識と体系的な概念をできるだけ簡潔・明確に記述している。本文の記述に関する本格的な理解を深めるため、関連する重要判例などをそのつど解説直下に記し、学習の便を図っている。

▼澤敷／鹿島愛彦他編著『洞窟学四ヶ国語(英日韓中)用語集』(二七三〇円税込)自然科学分野では膨大な学術用語関係書が刊行されているが、用語の不正確な表現・運用でその解釈や意思の伝達に混乱を生じる可能性があり、用語統一の必要性が求められている。本書は、アジア圏で使用されている断片的・不統一な洞窟学に関する用語を補完・整理した世界に類を見ない4ヶ国語対訳の洞窟学用語集である。漢字圏で文字・文化・慣習が類似している日本、韓国、中国の用語を比較してその関連性を明らかにしている。また貴重な世界各地の洞窟写真や図を多数収録して、洞窟の形態への理解が深まるように解説がなされている。

## 大阪大学出版会

▼松岡博著『新版』国際私法・国際取引法判例研究』A5判・三〇六頁・二一〇〇円 二七の重要判例を完全評釈。好評の初版をさらに充実。

▼横田睦子著『渡米移民の教育―葉で読む日本人移民社会―』A5判・二〇八頁六〇九〇円 移民の貴重な情報源である葉の意義と実態を詳述。

▼柏木隆雄他編著『エクリチュールの冒険―新編・フランス文学史―』A5判・三〇〇頁・二一〇〇円 作品の表現方法作者・映画を時代順に紹介。

▼渡部眞一郎・Risto Hilunen 編著『Approaches to Style and Discourse in English』菊判・二八八頁三九九〇円 英語文体論及び談話研究に關し多角的に論述。

▼桑原恵著『幕末国学の諸相 コスモロジー／政治運動／家意識』A5判・三二〇頁・六七二〇円 和泉の大庄屋中家の産霊思想と宇宙論。

▼増田幸子『アメリカ映画に現れた「日本」イメージの変遷』A5判・二三五頁二五二〇円 初期作品から現在まで日本人男女はどう描かれてきたか。

## 関西大学出版部

▼大庭 脩編著『長崎唐館図集成』(A4判・一四一七五円)国内外から集めた長崎唐館図の集大成がはじめて実現。140頁におよぶフルカラーの図版はまるで空から唐人屋敷内を覗き込むようである。日中交渉史に生涯を捧げた故大庭脩教授の絶筆をはじめ4編の論説とともに図版解説、英文解説が付き、読者の便宜を計っている。

▼ブルーノ・ラミレス著、伊藤健市訳『労働者が闘う時』(A5判・三六七五円)革新主義期の労働情勢をセオドア・ローズヴェルトやマーク・ハナが代表する政界、サミュエル・ゴンパースやジョン・ミッチェルが代表する労働界、そして全国市民連盟に参集した実業界、これら三者の織りなす歴史模様として克明に描いた高著の本邦初訳。

▼静 哲人著『NEW HORIZON SINCOMPOTERIZED READING』(B5判・四七二五円)パソコン制御の斬新な言語テストを提案する。たった4項目で40項目相当の信頼性を実現。全英文。

## 関西学院大学出版会

新刊

▼後藤明・松原好次・塩谷亨編

『ハワイ研究への招待——フィールドワークから見える新しいハワイ像』

若い世代の研究者を中心にした各フィールドからの論考は一般的なハワイ・イメージをうち破りハワイの面白さを再認識させてくれる。(A5並製・三四〇頁・定価二六二五円)

▼関西学院大学キリスト教と文化研究センター編

『民と神と神々と——イスラーム・アメリカ・日本を読む』

9・11をはさんで行った、国家・宗教問題の第一人者(池明観・花崎皋平・阿満利麿・小田淑子・小杉泰・中田考・森孝一・板垣雄三)らによる講演集をまとめる。(A5並製・二七〇頁・定価二五二〇円)

▼北米エスニシティ研究会(田中きく代・高木真理子他)編

『北アメリカ社会を眺めて——女性軸とエスニシティ軸の交差点から』

(A5並製・三〇〇頁・定価二八三五円)

## 九州大学出版会

▼藤井美男・田北廣道編著『ヨーロッパ中世世界の動態像——史料と理論の対話』

(A5判・六四〇頁・九八七〇円) 西欧中世史研究の第一人者、九州大学名誉教授森本芳樹氏の古稀記念論集。史料論を軸に西欧中世の世界を動態的に解明する、

気鋭の若手から中堅、練達の研究者二六名の論考。第一部「史料論の世界」、第二部「史料と理論の対話」。

▼中國聡著『九州弥生文化の特質』(B5判・六五〇頁・一四七〇〇円) なぜ弥生時代は開始されたか、なぜ古墳文化は九州から興らなかったか……。九州全域・

沖繩を主な対象として、東アジア的脈絡から弥生時代中期社会を解き明かす。認知考古学などの理論や新しい方法論を縦横に駆使して、独自の視点から弥生社会の実像に迫る意欲作。

▼森谷裕美子著『ジェンダーの民族誌——フィリピン・ポントックにおける女性と社会』(A5判・四七八頁・八六一〇円)

そこでは女性たちが主体的、戦略的にその役割を利用し、状況に応じて新たな役割を創りだしていく。本書は、民族誌を再構築してジェンダーを考える。

## 部会だより(営業部会)

### 40周年記念ブックフェアを終えて

日本出版部協会創立40周年の記念事業の一環として、昨年二〇〇三年度は、四月の東京国際ブックフェアを皮切りに、全国の大学生協と書店においてブックフェアを二〇〇四年二月まで開催した。

東京国際ブックフェア2003では、例年よりブースを拡大し、二倍のスペースで出展したことは、会員社の出版物が直接読者と、より多く出会える貴重な機会であったといえる。

一方店舗においては現品展示のほかに、専用カタログによる販売、また書店の協力で実現したネット上でのプロモーションは、どちらもフェアでは初めての試みであった。

今回のフェアは、現品展示を基調としつつも、紙、電子と媒体物こそ違いはあるが、現品と離れた普及方法の試みが始まった、貴重なフェアであったと評価している。また何万冊かのテキストや研究書等が、必要とする読者の手に渡った事実を、販売目標を達成したこと以上に受けとめておく必要があると考えている。

## PR誌『理(コトワリ)』の創刊について

関西学院大学出版会ではこの5月に当会PR誌『理(コトワリ)』を創刊した。

単に発行書籍のPRにとどまらず、新たな単行本企画へと結びつける「場」としての機能を持つことを意図したものである。現状ではまだまだ独自企画を数多く出版するのは難しく、刊行点数を安定させることが出来ない要因となっている。学内に散見する、未だ文章にまとまってはいないが企画へと発展する可能性のある題材などを、比較的気軽にこの冊子に提供してもらうことで本企画へと発展させるための契機としたい。その際こちらから積極的に著者にアプローチするための具体的ツールとしてもこのPR誌を活用したいと思っている。もちろん企画立案・編集の方向付けは、編集長のもと専門分野に応じて各編集委員の教員に協力を仰いでいる。

またすでに独自企画として進行している『日本近代人名地図』、『差異の詞典』を順次連載しており、将来単行本として刊行することを目指している。PR誌の側面としては、著者自身による自著の紹介やその書籍のテーマを専門とする第三者との対談・座談会なども企画し掲載している。

当会は無料配布で、主に当会発行の書籍に挟み込んで流通させる。もちろん書店へのDMにも同封する。大量に頒布するものではないが、だからこそ一時的な流行ではなく、真によいコンテンツを継続して取り上げていきたい。先験的な思いこみに支配されない、真の「理」を探る姿勢を表すものとして誌名を『理(コトワリ)』と名付けている。最近の社会状況をもみても、物事の筋道や道理にかなっていないことがあまりに多いのではないだろうか。こういった問題意識を誌名に込めている。今後年四回発行、一六頁程度と、今のところ先輩各社の内容豊富なPR誌には比べようもないが志は高く、この『大学出版』のように読者と著者を結ぶネットワーク形成の「場」として充実・発展させていきたいと考えている。

田中直哉(関西学院大学出版会)

## 関西支部だより

## 編集後記

私の家の近所で、住宅販売が盛んである。一軒を更地にし、そこに四〜六軒を新築して販売する。週末は至る所で見学会、客も多い。不景気でも、有るところには有るものだ。

私も先日、道を歩いていると不動産屋の若い営業に声を掛けられた。小さな机には小洒落た完成予想図が貼ってある。

「いかがですか、お安くなってますよ」  
八百屋みたいだ……「で、いくら？」

「ここは五八〇〇万、あちらは七五〇〇万」  
「わるい、いま持ち合せがないから」

やはり不景気なのだ。広い屋敷を手放す人がこんなにいるのだから。

……………\*……………

本号は、出版や書籍からは少し離れたテーマで特集を組みました。経験のないテーマで特集を組む、しかも「環境」という広い分野を取り上げることには、「テーマが広すぎて、まとまりが悪いのではないか」という意見もありましたが、敢えて方向を限定せず、これをもって編集方針としました。

今後、業界内の話題や書籍に関する記事に限ることなく、様々なテーマで特集を組んでいく予定です。

小野朋昭

(東海大学出版会・『大学出版』編集長)

# 日本大学出版部協会加盟出版部一覽

## 北海道大学図書刊行会

060-0809 札幌市北区北9条西8丁目 北海道大学構内  
TEL 011-747-2308 FAX 011-736-8605

## 東北大学出版会

980-8577 仙台市青葉区片平 2-1-1 東北大学構内  
TEL 022-214-2777 FAX 022-214-2778

## 流通経済大学出版会

301-8555 龍ヶ崎市平畑 120  
TEL 0297-64-0001 FAX 0297-64-0011

## 聖学院大学出版会

362-8585 上尾市戸崎 1-1  
TEL 048-725-9801 FAX 048-725-0324

## 聖徳大学出版会

271-8555 松戸市岩瀬 550  
TEL 047-365-1111 FAX 047-363-1401

## 麗澤大学出版会

277-8686 柏市光ヶ丘 2-1-1  
TEL 04-7173-3331 FAX 04-7173-3154

## 慶應義塾大学出版会

108-8346 港区三田 2-19-30  
TEL 03-3451-6926 FAX 03-3454-7029

## 産業能率大学出版部

103-0028 中央区八重洲 1-3-19 辰沼ビル7階  
TEL 03-5205-2255 FAX 03-5205-2470

## 専修大学出版局

101-0051 千代田区神田神保町 3-8-3 専修大学4号館  
TEL 03-3263-4230 FAX 03-3263-4288

## 大正大学出版会

170-8470 豊島区西巢鴨 3-20-1  
TEL 03-5394-3026 FAX 03-5394-3038

## 玉川大学出版部

194-8610 町田市玉川学園 6-1-1  
TEL 042-739-8935 FAX 042-739-8940

## 中央大学出版部

192-0393 八王子市東中野 742-1  
TEL 0426-74-2351 FAX 0426-74-2354

## 東京大学出版会

113-8654 文京区本郷 7-3-1 東京大学構内  
TEL 03-3811-8814 FAX 03-3812-6958

## 東京電機大学出版局

101-8457 千代田区神田錦町 2-2  
TEL 03-5280-3433 FAX 03-5280-3563

## 東京農業大学出版会

156-8502 世田谷区桜丘 1-1-1  
TEL 03-5477-2562 FAX 03-5477-2643

## 法政大学出版局

102-0073 千代田区九段北 3-2-7  
TEL 03-5214-5540 FAX 03-5214-5542

## 放送大学教育振興会

105-0001 港区虎ノ門 1-14-1 郵政互助会琴平ビル3F  
TEL 03-3502-2750 FAX 03-3592-2482

## 武蔵野美術大学出版局

180-8566 武蔵野市吉祥寺東町 3-3-7  
TEL 042-223-0810 FAX 042-222-8309

## 明星大学出版部

191-8506 日野市程久保 2-1-1  
TEL 042-591-9979 FAX 042-593-0192

## 早稲田大学出版部

169-0071 新宿区戸塚町 1-104-25  
TEL 03-3203-1551 FAX 03-3207-0406

## 東海大学出版会

257-0003 秦野市南矢名 3-10-35 東海大学同窓会館内  
TEL 0463-79-3921 FAX 0463-69-5087

## 名古屋大学出版会

464-0814 名古屋市千種区不老町 1 名古屋大学構内  
TEL 052-781-5027 FAX 052-781-0697

## 三重大学出版会

514-8507 津市上浜町 1515 三重大学出版ホール内  
TEL 059-232-1356 FAX 059-232-1356

## 京都大学学術出版会

606-8305 京都市左京区吉田河原町 15-9 京大会館内  
TEL 075-761-6182 FAX 075-761-6190

## 大阪経済法科大学出版部

581-8511 八尾市楽音寺 6-10  
TEL 0729-41-8211 FAX 0729-41-9979

## 大阪大学出版会

565-0871 吹田市山田丘 1-1 大阪大学事務局内  
TEL 06-6877-1614 FAX 06-6877-1614

## 関西大学出版部

564-8680 吹田市山手町 3-3-35  
TEL 06-6368-1121 FAX 06-6389-5162

## 関西学院大学出版会

662-0891 西宮市上ヶ原1番町 1-155  
TEL 0798-53-5233 (内線3475) FAX 0798-53-9592

## 九州大学出版会

812-0053 福岡市東区箱崎 7-1-146 九州大学構内  
TEL 092-641-0515 FAX 092-641-0172